

## ルカ 13・22-30

今日の福音には、「狭い戸口から入るように努めなさい」というみことばが響いています。今日の福音はルカ 13 章に記されているみことばですが、同じ内容のことはマタイ福音書 7 章の山上の説教の中にもあって、そこでは、「狭い門から入りなさい」と言われており、こちらのほうが、「狭き門」という言い方があるように、わたしたちにはなじみ深いかもしれません。狭き門にしろ、狭い戸口にしろ、問題は、この表現をもってイエスは何を今日わたしたちに語ろうとしておられるのか。よく知られているこのみことばを、今日の福音の中で、あらためてわたしたちはどのように受け止めようとしているのかということです。

マタイ福音書 7 章の山上の説教の中では、「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道は広々としていて、そこから入る者が多い。しかし、いのちに通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見出す者は少ない」と言われており、狭い門は、滅びに通じる広い門に対して、いのちに通じる門であることが分かります。滅びと言い、いのちと言う時、そのいのちとは永遠のいのちのことであり、そのいのちに達することが出来ないことが滅びであると、わたしたちはわたしたちの信仰によって知っているはずですが。狭い門、狭い戸口とは、聖書を通してイエスのみことばに耳を傾けてきた者たちにとっては、永遠のいのちに至るための門であり戸口であることは明らかです。このことは、今日のルカ福音書では、神がわたしたちすべての者をそこに招こうとしておられる「神の国の宴席」に入ることができるかどうかという終末論的な表現によって、いっそう際立っています。この戸口を家の主人が閉めてしまっただけからでは、外に立って戸を叩いても遅いという今日の福音のみことばを、わたしたちはどこまで真剣に受け止めていると言えるでしょうか。

それにしても、肝心の狭い門、狭い戸口は一体どこにあるのでしょうか。わたしたちはイエスが言われる、いのちに至る狭い門をどこに見出そうとしているのでしょうか。今日のルカ福音書とそれと関連するマタイ福音書の文脈とは異なりますが、狭い門の「門」ということばは、ヨハネ福音書の中にも見出すことができます。ヨハネ福音書 10 章の、「わたしはよい羊飼いです」と言う、わたしたちになじみ深いよい牧者のたとえの中で、イエスは「わたしは門である」とも言われています。ヨハネ 10 章 9 節からの箇所では、このように言われています。「わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊がいのちを受けるため、

しかも豊かに受けるためである」。ヨハネ福音書のこのみことばを考え合わせると、狭い門、狭い戸口とはイエスご自身を指してのおことばであると受け止めることができます。わたしたちが信じるイエス・キリストは、父なる神がその御子であるイエスをわたしたちの世界に遣わされることによって、イエスを通してわたしたちすべての者を招いておられる永遠のいのちへの戸口であり門であるのです。その戸口がやがては閉ざされる時が来る。その戸口が閉ざされてしまったからでは、門の外に立って戸をたたいても遅いのだと、今日のルカ福音書のみことばは告げているのです。

今日の福音の最初に戻って、イエスがこのみことばを語られた時にそれを聴いた人々の中に身を置くようにして、わたしたちも今日の福音のみことばを聴かなければなりません。エルサレムへの最後の道を行かれるイエスはその道すがら、

「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」という質問に答えて、その場にいた人々に皆に向かって、今日のみことばを語られたのです。今日わたしたちが聴いたみことばは、ルカ福音書に語られているこのような状況の中で、ますます緊迫した響きをもってわたしたちに迫ってきます。

福音書の中には、イエスによって病氣や不自由なからだを癒していただいたり、悪霊を追い出していただいた、たくさんの人々のことが語られています。それらの奇跡の御業を目の当たりにして神を賛美した、群集と呼ばれているたくさんの人々のことが語られています。イエスを囲んで食事の席に着いたレビの仲間であった徴税人たちや、イエスを食事に招待したファリサイ派の人々のことが語られています。さらには、ファリサイ派の人々や律法学者たちのイエスに対する非難や攻撃にも関わらず、イエスの教えに喜んで耳を傾け、イエス後に着いて行った大勢の人々がいたことも語られています。これらの人々のその後はどうなったのでしょうか。福音書はそのことについて、ほとんど何も語っていません。イエスの十字架の場面には、それらの人々の姿を見出すことは出来ません。こうして、今日の福音のイエスのみことばは実現したのです。イエスの十字架こそが狭き門、狭い戸口なのです。そしてその戸口は、今日の福音のイエスの招きのみことばにもかかわらず、福音書の中に語られてきた人々にとっては、イエスの十字架の死によって閉ざされてしまったのです。最後までイエスのもとに留まろうとした弟子たちにとっても、イエスの十字架の死はそのような時であったのです。イエスに付き従って来た弟子たちも、イエスの十字架に直面して、イエスが彼らを導き入れようとしたいのちへの戸口が閉ざされてしまったことを経験したのです。今日の福音に響くイエスのみことばは、イエスが言われたとおりに、このようにして、まさに悲劇的に実現したのです。

イエスがもたらそうとした真のいのちへの招きは、誰もそれに応えることのないままにイエスの十字架の死によって閉ざされてしまったのです。福音書に語られているイエスがもたらされた救いの訪れの時は、そのようにして幕が降ろされてしまったのです。けれども、わたしたちは、それこそが永遠のいのちへの戸口であるイエスの十字架の前に立って、聖母がそうされたように、十字架のイエスを仰ぎ見なければなりません。何故イエスが十字架の上に無残な姿を晒して死ななければならなかったかを心に留めて思い巡らさなければなりません。十字架の上に死んでゆかれたイエスは、誰もそこから入ることのないままに閉ざされしまったいのちへの扉をその内側から大きく押し開いてくださるのです。そのようにして、わたしたちは初めて、復活のイエスが招くいのちへの道を見出すことが出来たのです。イエスの十字架と復活こそが神がわたしたちを招くいのちへの門となったのです。今日もこのミサの中でイエスの十字架の死を記念するわたしたちは、十字架の死を越えて復活された、わたしたちのいのちの主であるイエスの招いておられるいのちの扉の前に立っているのです。

イエスの十字架の場面を思い起こすわたしたちの心の視界の中に、ルカ福音書は、イエスとともに十字架に架けられた一人の人の姿を浮かび上がらせませす。お前がキリストなら十字架から降りて、自分とおれたちを救ってみろと叫びたてる人々の中で、「イエスよ、御国にお出でになる時には、わたしを思い出してください」と彼は願ったのでした。このように願ったその人に対してイエスは「はきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と応えてくださるのです。このようにして、イエスが招くいのちの世界への扉は再び開かれたのです。今日もその扉はここに集うわたしたちの前に開かれています。イエスが招くいのちへの戸口が十字架の扉であることによって、わたしたちを恐れさせ、ためらわせることのないように祈り求めたいと思います。そのためにも、ルカ福音書に語られているイエスとともに十字架につけられたあの人のことを深く心に刻みたいと思います。イエスの十字架の場面の最後に登場するこの人は、地上における最後のいのちを引き取る前に、十字架のイエスの招きを受けて、永遠のいのちの宴に入る最初の人となったのです。

いのちへの戸口は、十字架の苦しみの最中であって、わたしたちの側にもにいてくださる十字架のイエスに目を向けることによって開かれるのです。十字架のもとにたたずまれた聖母が、わたしたちが担っている十字架を御子とともに耐え忍ぶ希望の光に包んでくださるよう祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高